

# 岳麓書院藏秦簡——秦簡にみる書体過渡期の姿——

角 田 健 一 (大 壤)

TSUNODA Ken'ichi (Tajio)

《岳麓書院藏秦簡》は二〇〇七年十二月、湖南大学の岳麓書院が香港古玩市場で購入したものである。したがって考古学発掘ではなく、真偽については各々が判断し扱う必要がある。ただし、科学的根拠(材質検査)や書写内容、書写形態など、多くの研究者によってその真偽の検討が行われ、『文物』(二〇〇九・三)で初めて世に知られることになった。また専刊『嶽麓書院藏秦簡』計五冊が出版されている。いずれにせよ、これら多くの眼の淘汰に耐えて残ったこの秦簡を無視することはできない。自己の美意識や知識に準じて、これらの簡牘を検討し臨むことが肝要である。

近年出土された秦の資料では『文物』(二〇〇三・一)で公になった《里耶秦簡》がある。これは二〇一二年になって専刊の大冊『里耶秦簡』第一輯・第二輯(湖南省文物考古研究所編・文物出版社)がこれまで刊行された。今後第五輯まで刊行される予定で、未だ倍以上の資料の発表が予想される前にも関わらず、既に従来の書

道史、特に文字変遷の概念を改めざるを得ないような発見がある。すべての資料が出揃った際には、更なる発見を期待せずにはいられない。秦代簡牘資料はそのような文字学的・書道史的にも大きな影響を与える魅力も包含している。

さて、《岳麓書院藏秦簡》では既に横田恭三「嶽麓書院藏秦簡の形式とその書風」(跡見学園女子大学文学部紀要二〇二〇・三)に「書体書風について総合すれば、当時通行していた書体(秦隸)を用いており、文字の書き振りに個性や習慣の違いがあつて多少のバリエーションが見られるものの、「占夢書」以外は睡虎地秦簡や里耶秦簡の書きぶりと同質の書きぶりである」と述べていて、その内容・書風・字体の指摘が為されて詳しい。

今回取り上げた題材はその「占夢書」である。内容は夢の吉兆・凶兆を判断したもので、睡虎地秦簡にも似た内容がある。書体はこの時期に違わず秦隸だが、とりわけ横田氏、また大西氏の指摘によ

れば地方（他の六国）から文字的に影響を受けているという。「占夢書」という内容（題材）がテキストとして伝承する中で、例えば原本に即した書き方なのか、もしくは書写者が日常的に使用する字形なのかといった問題がある。特に「占夢書」では楚系文字との関連性が指摘されており（肉筆資料に楚系が多いことにも起因するであろう）稚作で取り上げた部分にも所々に独特の字体が用いられているので、該当する文字を簡単に解説しておく。

其（丌）…字形は例えば楚系の《楚帛書》《包山楚簡》《郭店楚簡》で散見される上部を省略した「**元**」のような字形をとる。厳密に言えば「其」時と同字ではないが、「丌」は金文でも代名詞の「其」字に用いられることがあって、積文ではみな「其」。つまり異体字にあたる。ちなみに原則的には他の秦系簡牘はこの字形を用いないが、唯一先述の睡虎地秦簡で類似した内容である「日書」（吉凶を占った記録）にこの字形が見られる。この点は興味深く、他の六国からの伝来の原本テキストが文字に影響を与えていることを示唆しているように思う。

分…「刀」部に接続するような余分な一画がある。西周から戦国時代を俯瞰しても「**分**」の如く右部に余分に一画加筆される例は他

にはなく、原因もよくわからない。「占夢書」特有の字形といつてよい。一種見られるだけであれば偶然的要因として特に触れる必要はないが、一つの簡で二度同じ字形が出てくることから明らかに意図的な加筆と捉えることができるので一応附記しておく。

義…説文には「己之威儀也。従我、羊。」とあって羊+我。ただし当簡の字形から隸定するならば明らかに「**義**」の字形。これは説文或体「**義**」と同形。しかも単純に下部を「弗」に作るというより「我」と「弗」が混同したような形である。例えば楚系の「義」字を見ると「我」「女」「弗」といった字形が混在して使われており、一見単独では「義」として読めないような文字も散見されるように、この時期における「義」字が混乱した形で使用されていることが容易に推察される。ちなみに西周金文でも下部の位置や字形が安定せず、この頃から字体が不安定な文字でもある。

開…上部に「口」部が二つ加筆されるだけでなく「門」部にも大幅な省略が見られる。上部に付加されることについては推測の域を出ないので詳述は避けるが、特に「門」の省略は、漢代《居延漢簡》に至ってようやく「**門**」や「**門**」のような省略形が現れるのであって戦国期にはこのような省略体は見られない。この時期の字形と

しては特筆すべき事柄である。

藏・楚系簡牘では「𦘔<sup>3</sup>」の如く下部に「貝」が付く形もあり「臧」にあたるが、いずれも「藏」に通ずると考えて良い。なお徐鉉の注に「从艸、後人所加。」とあって一般的にはもと「臧」に作る文字とされるのが通例。ただ白川静氏によれば「臧」とは別義との指摘もあってなかなか煩瑣な文字である。今その字義については一旦置いておくことにするが、文字の変遷を考える上でも複雑な様相を呈する文字であることには違いない。

西周金文にはこの字は用例が無く、春秋時代になって使用され始める。それらを見るといずれも「戕+口」で「𦘔<sup>1</sup>」の如き字形。殷・甲骨文に一例だけ「戈+臣」で作る文字「𦘔」がある。ちなみに楚系簡牘はすべて「𦘔<sup>2</sup>（戕+口）」だが、秦系簡牘はすべて「戕+臣」。後の漢代に見られるこの文字は「𦘔<sup>3</sup>」や「𦘔<sup>4</sup>」の字形で、これらは一貫して「臣」で構成されている。春秋期の「臧」を有する青銅器は楚のものではないので、この時期の「臣」を用いた字形はある種、秦特有の字形と考えて良い。

也…ここでは字形ではなく、用法の問題がある。秦ではこの語気助詞としてもちいられる「也」を実際は「𦘔」（𦘔）を用いているこ

とが知られている。これは秦独特の用い方である。ところが、「占夢書」では「也」（𦘔）の字形が用いられていて秦系簡牘の通例の使い方と異なる。大西氏はこの「占夢書」が広く伝承された影響だと指摘している。

秦系簡牘文字は書体変遷の大きな過渡期となっていて、非常に興味深い点が多い。しかし詳らかに観察せねば見逃してしまうような変化も多く、しかもそれが大きな発見になることも少なくない。古代文字から草書まで広く文字を知る必要があり、これを解明していく作業は極めて時間と根気を要する分野である。

#### 【注】

(1) 新井光風「秦始皇帝時期に通行の草書文字―里耶秦簡でわかった新事実―」（大東書道研究・二〇二〇・大東文化大学書道研究所）、「秦始皇帝時期の草書文字Ⅱ―里耶秦簡に出現した『草書化現象』」（大東書道研究・二〇二一・大東文化大学書道研究所）などこれ以外にも里耶秦簡に限らず戦国簡牘文字における論文が多数ある。これらの新事実は、これまでの書体変遷・書道史の概念を大きく変えるものであり、示唆に富んでいる。

- (2) 大西克也「嶽麓書院藏秦簡をめぐって―赤外線スキャンと『占夢書』―」（書法漢学研究・二〇一四・書法漢学研究会）
- (3) 楚系文字には「臧」と「臧」とが併用されるが、他にも「臧」下部に「土」部が加わるものなどがある。「臧」、「臧」、「臧」は異体字の関係。
- (4) 掲出した文字は「襄伯子姪父盥」の文字。この器は山東省龍口市蘭高鎮南埠村出土。出土地から見れば齊國のものだが、字形からも明白に楚系のものではない。
- (5) 石鼓文には「泝毆泊々」とあって「毆」を用いるが、一方で泰山刻石には「於久遠也」とあって秦統一前後で使用する字形が異なることがわかる。



『簡牘名蹟選二一』（二玄社・二〇二二）より転載

天類、母失四時、生  
所宜、五、九、日、夢、水

四、力、吉、凶、人、身、節、善  
善、非、身、故、甲、乙、夢、水

其類、母失四時之所宜、  
五分日、參分日夕、  
吉凶有節、善義有故、  
甲乙夢開藏事也、丙丁  
夢憂也。

岳麓書院藏秦簡大鐘

160×40cm×3幅